ビイミダゾールにより架橋されたPt2核錯体の結晶構造と発光挙動 東理大理 〇永留大貴,岡田里菜,髙田紗織,磯谷和巨,亀渕 萌,田所 誠

Crystal Structure and Luminescent Behavior of Dinuclear Pt Complex Bridged by Biimidazole Ligand

 Hiroki Nagatome, Rina Okada, Saori Takata, Kazuo Isogai, Hajime Kamebuchi, Makoto Tadokoro Faculty of Science, Tokyo University of Science, Japan

[Abstract] Cyclometalated dinuclear platinum complexes bridged by two H₂bim (= 2,2'biimidazole) ligands, $[Pt(C^N)(H_2bim)]_2(NO_3)_2$ (C^N = phenylpyridine derivatives), have been synthesized. These complexes exhibit phosphorescence originated from MMLCT (Metal-Metal-to-Ligand Charge Transfer) and their emission wavelength strongly depends on Pt···Pt interaction. In this presentation, controlling Pt···Pt interaction, *i.e.*, Pt-Pt distances induced by a substituent effect will be described. Actually, we synthesized three complexes with different C^N ligands, and investigated their crystal structures. In UV-*vis* absorption spectra of these complexes, three bands attributed to MMLCT, LLCT and LC transitions were observed. Especially, the maximum absorption wavelengths of MMLCT bands varied in accordance with Pt-Pt distance, which is caused of charges in Pt···Pt interaction and substituent effect of C^N ligand. In the emission spectra, the maximum emission wavelengths also varied along the order of maximum absorption wavelengths. Additionally, an attempt to synthesize a hydrogenbonded polymer, $[Pt^{II}(C^N)(Hbim)]_2$, will be discussed.

【序】水素結合性官能基をもつ発光性錯体は 一般に水素結合を介した格子振動、H⁺の移動 に伴う励起電子やエネルギーの移動により 消光することが知られている。^[1]先に我々は 強い水素結合をもつ発光性金属錯体として Ir^{III}錯体同士を水素結合させたダイマー錯体 [Ir^{III}(C^N)₂(Hbim)]₂ (C^N = phenylpyridine 誘導 体)について研究した。その結果、C^N 配位 子の種類(Fig. 1)によらず発光量子収率がモ



Fig. 1. Molecular structure of C^N ligand



Fig. 2. Molecular structure of $[Pt(C^N)(H_2bim)]_2^{2+}$

ノマー錯体 [Ir^{III}(C^N)₂(H₂bim)](ClO₄)の2倍程度増加す ることが明らかとなった。本研究ではこのような強い 分子間水素結合が可能な H₂bim (= 2,2'-biimidazole)によ る発光性 Pt2核錯体 [Pt^{II}(C^N)(H₂bim)]₂(NO₃)₂を合成し た。(Fig. 2) Pt²⁺は Ir³⁺と同様にスピン-軌道相互作用に より、りん光発光性錯体を形成する遷移金属イオンで あり、水素結合部位をもつ発光性錯体の新たな物性を 開拓しようとするものである。また、Pt²⁺の複核錯体は 5d_z²軌道同士の重なり合いによる金属-金属相互作用に よって分裂した軌道から配位子軌道への遷移である MMLCT (Metal-Metal-to-Ligand Charge Transfer) による発光が観測される。 [Pt^{II}(C^N)(H₂bim)]₂(NO₃)₂における発光もこの MMLCT 遷移に起因するものであり、い くつかの置換基を持つ C^N 配位子を配位させることで Pt-Pt 間の相互作用の大きさを 変化させることに成功したので報告する。

【方法】発光性 Pt 2 核錯体 [Pt(C^N)(H₂bim)]₂(NO₃)₂ (C^N = ppy (2-phenylpyridine); (<u>1</u>), dfppy (2-(2,4-difluorophenylpyridine); (<u>2</u>), MeOppy (2-(4-methoxyphenylpyridine); (<u>3</u>))の合成は Cl 架橋体 [Pt(C^N)Cl]₂ に AgNO₃ を加えて Clを引き抜き、H₂bim を作用させる ことで行った。いずれも単結晶化することに成功し、X 線構造解析によって分子構造 を明らかにした。

【結果・考察】単結晶 X 線構造解析の結果 からいずれも Pt^{II}-Pt^{II} が H₂bim によって架 橋され、Pt^{II}-Pt^{II}結合が形成された構造であ り(Fig. 2)、Pt^{II}-Pt^{II}間距離が phenylpyridyl 配 位子の置換基によって変化することがわ かった。2 に関しては単結晶が得られたも のの構造解析の結果、Pt の軸位に Cl⁻が配 位した構造であることがわかった。UV-vis スペクトルの結果は、それぞれの錯体にお いて Pt²⁺から H₂bim への MMLCT 遷移と phenylpyridyl 配位子から H2bim への LLCT (配位子間)遷移、LC(配位子内)遷移の3 つの吸収帯がみられた。特に MMLCT 遷移 の吸収は 1 > 2 > 3 の順に長波長側に 見られた。これは phenylpyridyl 配位子の置 換基効果と Pt-Pt 相互作用に由来するもの である。1~3のCH₂Cl₂中における発光 スペクトルを Fig. 3 に示した。また、この 発光における発光極大波長 (λ_{em})、発光寿



Fig. 3. Emission spectra of <u>1</u>, <u>2</u>, <u>3</u> in CH₂Cl₂. $\lambda_{ex} = 435 \text{ nm}(\underline{1}), 423 \text{ nm}(\underline{2}), 420 \text{ nm}(\underline{3})$

命 (τ)、量子収率 (Φ_p)を Table 1 にまとめた。CH₂Cl₂中での<u>1</u> ~ <u>3</u> の λ_{em} は UV-*vis* ス ペクトルの MMLCT 遷移の波長シフトと同じく<u>1</u> > <u>2</u> > <u>3</u> の順に長波長側に見ら れ、MMLCT エネルギーギャップが大きいほど長寿命を示す傾向にあった。 Φ_p は<u>2</u> > <u>1</u> > <u>3</u> の順に高収率であった。これは配位子の電子求引性が大きいほど phenylpyridyl 配位子の π^* 軌道が安定化され MMLCT 遷移の効率が上昇するためであると考えられ る。

当日は脱プロトン化体 [Pt(C^N)(Hbim)]2 の発光挙動をモノマー錯体と比較して、 Hbim⁻の水素結合が与える効果について議論する予定である。

Table 1. Emission data of $\underline{1}, \underline{2}, \underline{3}$ in CH_2CI_2				
	Complex	$\lambda_{\rm em}$ /nm	$ au$ / $\mu m s$	$arPsi_{ m p}$
	<u>1</u>	587	0.84	0.137
	<u>2</u>	569	1.10	0.192
	3	557	1.46	0.125

Table 1. Emission data of 1, 2, 3 in CH₂Cl₂

【参考文献】

[1] J. C. Freys, G. Bernardinelli, O. S. Wenger. Chem. Commun. 36, 4267 (2008).